

赤木桁平

ロマンチズムの時代



# 第一章 ロマンチズムの時代

（『漾虚集』——『四編』）



厳密な意味から云うと、先生の製作を考覈こうかくする時、全く先生の俳句や、俳体詩や漢詩などを閑却するのは不穩当だと思うが、今は敢て其不穩当を侵し、先生の散文的方面の製作に就てのみ卑見を述べることにしたい。それに就て必要なのは考覈の順序であるが、大体に於いて自分はその製作の上梓された年代に従い、必要に依じて時には発表時期の遲速を標準とする場合もあるうと思う。第一に『吾輩は猫である』を論ぜずして、発行期の前者よ

りも後にある『漾虚集』を論ずるが如きは、其一例である。

『漾虚集』  
ようきよしゆう

これは『倫敦塔』、『カーライル博物館』、『琴のそら音』、『幻影の盾』、『一夜』、『薤露行』かいろうこう及び『趣味の遺伝』なる七個の短篇を集めたものであつて、その大部分は明治三十八年中に『ホトトギス』、『帝国文学』などの誌上に発表されたものである。

これらの諸篇の中、『倫敦塔』、『幻影の盾』及び『薤露行』の三篇は、共に資材を歐洲古代の伝説に取つたものであるが、その着想に於いて、は將た、その文体に於いて、殆んど同一範疇の下に掩括さるべき性質の作品である。これに反し、『カーライル博物館』以下の四篇は、単に作者の空想に依るか、若くは、作者自身の経験に依つて拈出ねんしゆつせられた作品であつて、その形式の全体を一貫する傾向から云うと、前後の両者ともに、短篇小説と  
いうよりもむしろ物語というのを妥当とする。殊に、前者の三篇に至つては、興味の焦点を多く情調の上に置き、

結構の主眼を殆んど韻律的表現の上に集めた点に於いて、自分はこれを一種の散文詩であると云いたい。——取材の傾向は異なるが『一夜』のごとき作品にも、またそうした特色が著しく現れている。

『倫敦塔』は『漾虚集』中に於ける圧巻の逸品であるばかりでなく、漱石先生製作の前期を代表する名作であつて、永くわが文壇に於ける稀有の珍宝たるべきものである。——元来この作品は、先生が英国留学時代に參觀せられた倫敦塔に対する回想をたていと経とし、これに倫敦塔そのものが有する過去幾百年間の歴史をよこいと緯として織り上



げられた空想的産物であるが、その措辞の瑰麗かきれいにして、一字一句の末に至るまで繊細なる彫琢の施されている点に於いて、また、その落想の奇抜にして、一事一物の微に至るまで鋭敏なる神経の行き互っている点に於いて、この作品は慥かに驚くべき芸術的完成を示している。殊に、この作品の処々に挿入せられている歴史的事実、例えば逆賊門の故事や、二王子の幽閉や、ジェーン・グレイの処刑などは、それが極めて簡単なる叙述の裡に描き出されていながら、皆潑刺たる戯曲的状景を以て、読者の眼前に迫って来る。凡手ならざる所以であろう。

『倫敦塔』に較べると、『幻影の盾』及び『薤露行』の二篇は、共に幾分の見劣りがしないではないが、しかも猶お十分に逸品たるの資格を備えている。殊に、ランスロツトの美しい物語を描いた『薤露行』の一篇は、その叙説の華麗であつて艶麗なるにも似ず、いささかも俗悪浮誇の厭うべきところがなくて、極めて瀟洒な、且つ、極めて上品な作品たるを失わない。中に就いても、全篇を通じて豊かに流れている叙情詩的諧調は、最後の二頁に至るまでよく読者の心魂を魅惑して、あくまで作者自身の芸術的境地を徹せしめる力がある。——『幻影の盾』

に至っては、なるほど冒頭数頁を領する叙述のごとき、到底他作家等の追従を容ゆるさないほどの佳所がないではないが、その全体に就いて見ると、どうも渾然たる趣致に於いて欠けたようなところがある。言葉を換えて云うと、構想の全体を統整する芸術的基調の上に、濃淡、緩急、強弱に就いての適當なる調和が欠け、何となくおつとりした趣きが乏しいのである。

以上の三篇以外の諸篇のうち、自分の認めて最も佳作であると思うのは『カーライル博物館』である。云うまでもなく、この作品は先生在英時代にカーライルの遺宅

を訪問せられた事実を記述せられたものであつて、全体が何等の奇を求めず、何等の妙を銜てらわない書方であるが、その平淡率直の記述の裡に、猶お云うに云われない味あじわいがあつて、最も善い意味に於ける先生の芸術的要素が滲み出たものである（この一文と後年物せられた『ケ―ベル先生』という一文とを比較せよ）。その点に於いて見ると、自分は『幻影の盾』よりも猶おこの一篇を高く値踏みするかも知れない。『カーライル博物館』以外の三篇中で、最も特色ある作品は『一夜』と題するものであるが、世評のかなり高いに關らず、自分はこの一篇を

以てしかく優れたものだと思わない。自分をして忌憚なく云わしめると、この一篇には文字の空疎なる遊戯がある。感情の不自然なる誇張がある。概念の安価なる露出がある。これらの欠点は、作品そのものの上に悪影響を及ぼして、何となく一種の嫌味を齎もたらしている。そこに行くくと、逸品とか名作とかいうことは出来ないが、『琴のそら音』及び『趣味の遺伝』と題する二つの作品は、兎に角無難な出来だと云っていい。併し、純粹な芸術品として見ると、前者が動やもすれば散漫な叙述に陥り易い弊所があるのに対し、後者は屢々乾涸な談理に赴き易い



て、皆以上の作品中に現れている。殊に、『倫敦塔』、『幻影の盾』、『薤露行』の三篇は、そうした傾向を最も鮮かに宣明した作品であつて、作者が空想と現実との中間を彷徨しながら、猶お両者の間に存する芸術的気分の調和を保つて行く手腕は、テオフィル・ゴーチエ以外、自分には先生に匹敵する近代の作家あるを知らない。——嘗かつて森鷗外氏はその作『青年』の一節に於いて、暗に漱石先生を意味したとも見るべき一作家の作品を評し、「彼の書いた外国の伝説を材料とする物語などは、泰西に於いてすら多くその比儔ひちゆうを見出しえないほど優れたもので

ある」という意味の讃辞を捧げていられたように思うが、それがたとい仮令先生及び先生の作品を意味したものでないにしても、直ちに移して以て『倫敦塔』以下の諸篇を批評した言葉と認めることが出来よう。この意味に於いて、先生はある批評家の所謂「軽蔑されたロマンチストの所有物たる感じたり、夢想したり、渴仰したりする能力ばかりでなく、また勇氣をも復活させた作家である」。何故なれば、これらの作品が発表された当時の文壇は、あたか恰も自然主義文学の勃興時代であつて、人々の頭と心とは、漸次物質と現実とに蝕ばまれ、人々の目と耳とは、



漸次神秘と幻影とから遠ざかりつつあったからである。

『吾輩は猫である』

この一篇の作品に依って、わが国の文壇に初めて世界に誇るべき諷刺とユーモアとの文学を得た。——それは、これまでのわが文学に於いて全然欠如せるものであり、且つ、永久に欠如すべき性質のものだと思われていたものである。嘗て高山樗牛は云う。「吾等は諷刺を愛す。而も今の人の所謂諷刺家を歓迎する能わざるなり」と。

また云う。「古と今とを通じて我国の文学者にはユーモリスト少し。一つの巢林子そうりんしが作に就て間々まま之を見ると雖も、是れはた情浅くして其意多くは卑し。吾等はユーモルの欠乏をば、我文学の一短所として常に慨なげかわしく思ひ居たり」と。若し樗牛にしてこの作に接していたならば、果して何と云ったであろう。

明治三十八年の二月から約二カ年間に亘つて『ホトトギス』誌上に連載されたとき、この作品が一挙にして贏かちえた人気と評判とに就いては既に述べて置いた通りであるが、それらの莫大な人気と評判とを以てしても、猶

お十分にこの作品の価値は認めていられないような気持がする。——サント・ブーブの云った言葉に従えば、「俗衆というものは、ただ美しい衣装を見るだけで、その美しい衣装の下に隠れている美しい肉体を見ることは出来ない」ものだから……。

人も知るように、この作品は珍野苦沙弥なる中学教師の家に飼われた猫という一動物の眼を借り、頭を借り、口を借って、人間及び人間生活に対する深酷奇警なる観察と、辛辣皮肉なる批評とを試みたものであるが、その第一の価値は、先ず何よりも表現そのものの裡にある。

實際、『吾輩は猫である』の文章は暢達自在である。縦横無礙である、聊かの苦渋もなければ、聊かの停滞もない。軽きこと雲のごとく、軟きこと綿のごとき筆致を以て、殆んど端倪すべからざる底の学殖と、殆んど企及すべからざる底の空想とを駆使し、通卷七百余頁、描き来り描き去り、最後の一頁に至るまで、些の疲労、些の弛緩をも示していないのである。

この作物に於いて、漱石先生は随分手厳しい諷刺と、随分大胆なユーモアとを發揮されたが、その諷刺なり、そのユーモアなりは、徹頭徹尾上品に、徹頭徹尾温藉に、

徹頭徹尾平調に発揮されているから、この種の作物に於いて屢々見るがごとき卑俗や、猥穢や、冷峭れいしやうやは、その何れの部分に於いて探し覓もとめても、到底これを見出すことは出来ない。併し、その上品に、温藉に、平調に発揮されている先生の諷刺とユーモアとの中には、人間及び人間生活の虚偽と、不正と、腐敗とに対する燃ゆるがごとき憤りがあって、その憤りの発するところ、間々慷慨激越の調を作しているものもないではない。例えば、金田夫人を主題とした一節などには、現代に於ける富豪者流の驕慢なり、横暴なり、悖徳はいとくなり、浅薄なり、卑劣

なりに対する骨を刺すがごとき痛罵があり、また、落雲  
 館生徒の乱暴を記述した一節などには、現代に於ける教  
 育制度の欠陥と、一般学生の墮落した気風とに対する肉  
 を抉るえぐがごとき冷嘲があつて、作者自身の主観裡に把握  
 された対人生の態度には、往々厭世的ペシミツクにして、且つ、  
 厭ミザンストロピツク人的な調子すら見出すことが出来る。茲ここに至ると、  
 その作物全体を蔽うているユーモラスな気分は、最早、  
 何等の調停的、緩和的使命をすら果すことが出来なくな  
 り、むしろ反つて、その作物の奥底を流れる悲壯的な感  
 じを益々強調するような反対の結果を招いている。――

作者の胸裡に押し来る実感（情熱）の強味が、遂にユーモアの仮面を剥奪せずんば止まない程度にまで騰進したのである。当時『東京朝日新聞』紙上で、二葉亭四迷と推すべきグリル・マルキンなる人がこの作を評して、「猫は決してユーモリストの作でない。サテリストの作である。更に進んで云えば、スケツプテックの作である。言いでべくんば深刻悲痛なるユーモアである」と云ったのは、思うにこの作品が有するこうした一面にのみ着眼した結果であろう。

遮莫、この作物は矢張人生を愛し、人生に対して暖い

同情と広い理解とを有する人の作物である。如何に苛辣からつ痛烈な文字を列べ、如何に深刻冷峭な語句を陳ぬつらる時に於いても、さらに言葉を換えて云うと、如何に実感が逼迫し、如何に情熱が燃烧した時に於いても、作者は猶お人生に対して一味の愛着を有し、人生そのものの与える内容に対してある種の牽引を感じている。『吾輩は猫である』一卷を通じて、何処となく一道の春風が行き渡るような暖かさのどかと、長閑さと、静けさのどかとがあるのは、全くこうした理由に因縁するものである。この意味に於いて、先生は人間を愛し、人生を愛したが故に諷刺し、諷



刺するが故にユーモアに走った。一つは一つの救拔であり、一つは一つの援護であつた。

純粹に鑑賞的な見地に立つと、『吾輩は猫である』が有する興味の焦点は、矢張諷刺とユーモアとに相違はないが、その諷刺とユーモアを潤色して、これに生々の諷刺味を附加したものは、全く先生個有の饒富じょうふうなる聯想能力である。しかもこの饒富なる聯想能力は、その背後に該博なる学殖と、高邁なる見識とを控えて、益々陸離たる光彩を加えた。殊に、求めずして自ら得られたる機智諧謔の才は、随所に散在する幾多の警句を生んで、一読

卷を擱おくに忍びないほどの興趣を齎もたらしている。——  
つの場合から云うと、泥棒が苦沙弥先生の宅に忍び込ん  
で山の芋を盗んで行く一節と、迷亭及び独仙が床の間の  
前に碁盤を据えて対局する一節とは、ともに依い々い低徊の  
情趣に富んでいて、容易く非儔を見出しえないほどの名  
文である。

最後に、自分は先生が英国十八世紀に於ける最大の諷  
刺家であったヨナサン・スウィフトに就いて云われた言  
葉を茲こゝに引抄して筆を擱きたい。それは先生の場合に於  
いてもまたある程度まで改鑄を加える必要なく云いえら

れる言葉だと思う。

此人は欠点もあるには相違ないが大家である。彼は最も強大なる諷刺家の一人である。彼は理非の弁別に敏く、世の中の腐敗を鋭敏に感ずる人である。病的に人間を嫌忌したという名を博したに拘らず、親切な人である、正義の人である、見識を持った人である。見識がなければ諷刺は書けない。妄りみだに悪口を吐いたり、皮肉な雑言を弄することは誰にでも出来るが、真に諷刺とも云うべきものは、正しき道

理の存する所に陣取って、一隻の批評眼を具して世間を見渡す人でなければ出来ないことである。スウイフトの諷刺は堂々たる文学である。後代に伝うべき述作である。

『鶉籠』  
うずらかご

この集には『草枕』、『坊っちゃん』及び『二百十日』の三篇が収められている。——『坊っちゃん』は先生が伊予松山の県立中学に赴任せられた当時の経験を土台と

して書かれたものであることは既に云った通りであるが、『草枕』と『二百十日』とは、ともに先生が熊本の高橋時代に於ける経験を基礎として書かれたものらしい。聞くところに拠ると、熊本に在任の当時、先生は屢々おあま小天温泉（熊本の西、金峯山の山腹、有明湾を脚下に見たところにある）という温泉場に出掛けて逗留せられたことがあるそうだが、その都度宿泊せられた宿屋が前田かがし案山子という人の経営であって、その人の娘にちようど恰度『草枕』の中に出て来るような女がいたということである。また、『二百十日』の方は、先生が阿蘇の噴火口に登臨

を試みられた当時の記憶が、一篇の骨子になっているの  
だろうと想像する。

『坊っちゃん』は『吾輩は猫である』に次いで広く読ま  
れたものである。この作品の興味は、勿論その瓢逸にし  
て奇警なる文章にもあろうし、また、その自然にして痛  
快なる構想にもあろうが、全体の上から見て、最も強く  
読者の心を惹き付けるものは、この作品の底に流れてい  
る至純なる感情と、この作品の背後に隠れている素樸な<sup>そぼく</sup>  
る道念とである。

著者は嘗て『坊っちゃん』を読んで、坊っちゃんと清

という女中のことを書いた一節に出会した時、まつげの先  
きへ不ふ凶と涙の滲んだことを覚えている。近頃『坊っちゃん』を読み返して、また同じ経験を繰返した。『坊っちゃん』が面白いのは、全くこうした純樸な感情に動かされるからである。こうした純樸な感情がなかったならば、作者の筆が如何にユーモラスに動いて行っても、決して読者を動かすことは出来ない。坊っちゃんが坊っちゃんらしく活躍するところには、必ず人間の純樸な感情が活躍している。それが面白くもあれば、尊くもあるのである。こういう意味に於いて、『吾輩は猫である』に於い

て表れていた先生の正義感は、この作品に於いて最も至醇なる表現をえているように思う。

中学校生活の愚劣さや醜さを描いている作者の態度には、かなり観照的な余裕がないではないが、教員会議や宴会の愚劣の光景を描出した一節などに至ると、その描写が殆んど靈活の域に達していると共に、さす遠がに作者自身ようすの極度に苦り切った容子が見えるような感じがする。殊に『坊っちゃん』には先生の性格描写に対する卓越した技倆が現れ、赤シャツと称する教頭や、野だいこと称する凶画の教員や、山嵐と称する数学の先生などが、皆



さながらの实在性を帯びて描き出されている（尤も、その性格描出には、幾分チピカルなところがないでもない）。

『二百十日』は清淡な詩趣に富んだ作品である。山下の温泉宿に泊った阿蘇登山の客が二人、秋風の吹く中を響いて来る村鍛冶の鉄礎かなしきを打つ音を聞きながら、幼年時代のとりとめもない思い出を話し合ったり、二百十日の阿蘇に登って、吹きしきる嵐の中に吐き出す噴火口のどす黒い煙を眺めながら、瀟々しょうしょうたる薄すすきに紛れて道を失して終しまうことなどを書いたものである。全体は殆んど簡潔な対話から成り立ったものでありながら、作者の覘ねらった

境地は遺憾なく現れている。

秋風の温泉宿、二百十日の阿蘇、村鍛冶の打つ鉄碓の音、幼年時代の寒念仏かんねぶつの話、肥後訛りの下女、——そうしたものを一貫する作者の趣味は、慥かに作者が俳人としての閱歴を思い起させる。如何にもゆったりとしていゝる。如何にも伸んびりとしている。しかも、そのゆったりとしたもの、その伸んびりとしたものの中に、汲めども尽きないほどの情趣がある。これを名なづけて俳味と云うもよからう。低徊趣味と云うもよからう。兎に角、この作品などは先生でなくては到底書けないものである。

対話はうまい。対話の中に時々挿んである地の文は愈々うまい。——「風呂場を出ると、ひやりと吹く秋風が、袖口からすうと這入って、素肌を臍へそのあたり迄吹き抜けた。出臍の圭さんは、はつくしようにと大きな苦沙弥を無遠慮にやる。上がり口に白芙蓉はくふようが五六輪、夕暮の秋を淋しく咲いている。見上げる向うでは阿蘇の山がごうごうと遠くながら鳴っている」という一条などを読むむと、自分は、それだけでもう立派な作品になっていると思う。

『草枕』は『鶉籠』一卷の代表的作品とも見るべきもの

である。

嘗て高浜虚子氏が、先生の作品『幻影の盾』、『坊っちゃん』、『野分』などの諸篇が纔わずか一週間ばかりで脱稿したという事実<sup>に</sup>就いて述べ、「その当時漸く原稿紙十枚か二十枚位の写生文をやつと書き上げて、何か大作業を仕遂げでもしたように思っていた私等仲間のものには、夏目さんの原稿の書き上げ方が不思議な位に考えられて、その一気呵成的の達筆に驚かされたものであった。この頃の夏目さんの筆は何の渋滞するところもなく、縦横無礙むげに奔馬のような勢で書き上げられたものであつ

た。初め文章の方では先輩のつもりでいた私等仲間の者達は、殆んど皆呆気にとられて、奔馬空を行くような状態をぼんやり眺めているばかりであった」ということを云っていられたが、雑誌『新小説』の囑に依って、先生が『草枕』二百余枚を書き上げられるために費された日数も、纔かに二週日を出でなかつたということである。

多年の間爆発しようとしてしなかつた先生の創作熱が、ひとた一度びごうぜん囂然として爆発した時の壯觀を思うと、自分は坐そぞろにそれを明治文学史上に於ける一大事実だと思わざるをえない。実際、カーライルが云ったように、「抑制に

抑制を加え、圧迫に圧迫を加えたほど、その爆発は大きなものである」。

『草枕』の筋は簡単である。ある西洋画家が山峡の春を求めて、物古<sup>ものふ</sup>りたる温泉宿の一室に幾日かを過し、風変りなる一人の美しい女を相手にして、心ゆくほど所謂「非人情」の境地を楽しむというのである。その間には茶屋の婆さんが出る。馬子が出る。古い時代の伝説が出る。江戸兎の床屋が出る。禅宗の老僧が出る。満洲に行くと、いう男が出る。種々雑多な人物や事件が出たり起つたりするが、それらのすべてが皆作者個有の趣味に溶化せら

れて、何等の破綻もなく、渾然たる芸術境を構成しているのである。ボードレールの言葉を借りると、『草枕』に描かれている芸術境は、作者その人にとっての「人為的天国」であると云っている。

『草枕』に至って、もっと悉くわしく云うと、『草枕』に描かれている芸術境、即ち「非人情」に至って、漱石先生のロマンチズムは始めて爛漫たる花を開いた。そこには明かに現実を去って空想に赴き、人間を棄てて自然に即つこうとする欲求と、その欲求の動くところ、あらゆる現象から逸れて、遠く可想の天地に入ろうとする熱意と

がある。『漾虚集』にあつては、これが未だ一種の傾向に過ぎないようなところがあつたかも知れないが、『草枕』に至つては、最早儼げんとした一種の信仰になつている。先生は云う。

「苦しんだり、怒つたり、騒いだり、泣いたり人は人の世につきものだ。余も三十年の間それを仕通して、飽々した。飽き飽きした上に芝居や小説で同じ刺激を繰り返しては大変だ。余が欲する詩はそんな世間的の人情を鼓舞する様なものではない。俗念を放棄して、しばらくでも塵界を離れた心持ちになれる詩である」。また云う。「越



す事のならぬ世が住みにくければ、住みにくい所をどれほどか、寛容くつろげて、束の間の命を、束の間でも住みよくせねばならぬ。ここに詩人という天職が出来て、ここに画家という使命が降る。あらゆる芸術の士は人の世を長閑にし、人の心を豊かにするが故に尊とい——この意味に於いて、先生のロマンチズムは、その心因を矢張諷刺とユーモアとの廻避的思想に発している。先生の内的生活に於ける鬱憂と苦悶とが、こうした二つの道を選んで漏らされた点にはかなりの興味がある。

『草枕』の文章は、その絢爛瑰麗なる点に於いて、当時

の文壇を驚倒せしめたものである。同じく絢爛瑰麗ではあるが、『幻影の盾』、『倫敦塔』、『薤露行』などの文章が多く洋文脈を引いた文章体であるに反し、『草枕』の文章は著しく漢文脈を引いた口語体であって、両者の間にはかなり際立った相違がある。何れにしても、わが文壇稀れに見るの名文であって、単に文章という点から云っても、十分永久に残るだけの価値があるろう。併し、今日の眼から見ると、『倫敦塔』などの文章が徹頭徹尾至醇な趣致を持っているのに較べると、『草枕』の文章には、先生自身の所謂「瑰麗眼を喜ばしむるに足ると雖も

多少の芝居氣」があつて、そのスタイルや気分の上に、猶お多くの混濁と蕪雜ぶざつとがあり、且つ、何となく一種の臭味を感じさせるところがある。思うに、前者の記述があくまで抒情的気分を以て一貫しているのに対し、後者の記述は、時に叙事となり、時に抒情となり、時に談理となつて、動ややもすると、全体を統整する気分の調和を傷う傾向があるからであろう。従つて、前者が立派な散文詩としての本質を有しているに關らず、後者は矢張小説とか物語とかいう範疇に属すべきものである。

## 『四篇』

この集には『文鳥』、『夢十夜』、『永日小品』、『満韓  
ところどころ』の四篇が輯あつめられているが、『満韓とこ  
ろどころ』を除いた以外の三篇は、皆ロマンチズムの  
匂いに富んだ、宝玉のように愛すべき短篇である。

中に就いても『文鳥』の一篇は、全体が写生文脈を引  
いた文章であって、著しく叙事的分子の勝ったものであ  
るが、慥かにこの集を代表するに足る逸品であろうと思  
う。殊に、この一篇を読んで最も面白く感ずる点は、籠

の中に於ける文鳥の動作を、極めて細緻に、極めて可憐に、極めて美麗に描き出したところであつて、その文鳥の動作を過去の女に結び付け、これに夢のような追想を托するところなどに至っては、その構想と技巧との妙、殆んど読者をして酔わしめるようなものがある。

『夢十夜』は十日間の夢物語という形式で、全体の感じが何となくツルゲーネフのそれを思い起させるような十個の散文詩を集めたものである。その中には勿論上出来のものとは出来のものがあつて、一様に全体の価値を評価するわけにはゆかないが、「第一夜」と「第五夜」

と「第六夜」とが最も面白く、「第二夜」と「第三夜」とは最も面白くない。「第四夜」も爺さんが河を渡って見えなくなるところが好き、「第七夜」も海に飛び込んで後悔するところが好き、「第十夜」も七日六晩豚を殴り殺すところが好きが、作品全体の上から云うと、矢張り前に挙げた三篇が最も優れていると思う。

「第一夜」を読むと、ウォルター・ペーターが『文芸復興』の劈頭に挙げたフランスの古い口碑を読むような気持ちがある。女が死ぬるところの描写はあまりにリアリティックであるが、大きな赤い日が東から出て西に落ちて

行くところや、石の下から青い茎が伸びて真白な百合の花が咲くところなどは、如何にもロマンチックな美しさに充ちている。「第五夜」は後半がいい。女が白い馬に乗って一散に飛んで来ると、途中で天探女あまのじやくが鶏の鳴声をするとというのが古雅だ。「第六夜」は理詰めなところがツルゲーネフの散文詩式であるが、兎に角違った意味で面白いに相違ない。護国寺の山門で運慶が仁王を刻んでいるという思い付きは、思い付き自身が既に奇抜である。

『永日小品』には二十五篇の小品が集められている。中には散文詩のようなものもあれば、また、短篇小説のよ

うなものもあって、皆それぞれに面白い。殊に面白いのは先生のロンドン滞在中の材料に依って出来上ったものであって、『下宿』、『過去の匂い』、『霧』、『昔』、『クレイグ先生』なぞの諸作は、皆芸術味の豊かな小品である。殊に、「霧」の叙述は真に逼せまった巧みさがあり、『昔』の文章は詩から生れた美しさがあり、『クレイグ先生』の描写は確実な印象の捕捉があつて、坐そぞろに作者の芸術的天分の深さを思わせる。その他のものでは、何となくゴーゴリの『肖像画』に似通つたような感じを起させる『モナリザ』や、アナトール・フランスの短篇に似通つ



たような感じを起させる『金』<sup>かね</sup>などがいい。何れ<sup>いず</sup>にしても手に入ったものである。

『満韓ところどころ』は先生の全作中に於ける唯一の旅行記であって、学生時代の追憶を叙したところや、南満の蕭条たる風物を描いたところにはかなりの面白さがあるが、それ以外には別これと云って取り立てていうほどのこともない。文章は平淡で上品で、それでいて何処にか瓢逸なところがある。この瓢逸なところを見て、生真面目一方の長塚節氏は、「漱石は人を馬鹿にしている」と云ったものらしい。



日本文学電子図書館

---

## ロマンチズムの時代

著 者：赤木桁平

制作者：宮澤一郎

底 本：「夏目漱石」

講談社学術文庫、講談社

2015年12月10日 第1刷発行

---

日本文学電子図書館